

# 第四章

## 非凡に生きる闘志

木更津に暁星国際学園を設立、英国ミルトン・キーンズにも進出



## フランス政府の招待で留学

1960年（昭和35年）から9年間務めていた暁星学園の校長を、1968年（昭和43年）に辞任。フランスに留学しました。この留学は、フランス政府が招待してくれた形になっています。

暁星学園の校長をしている時に、フランス大使館からフランス人の学校を作りたいという相談があったんです。どうしても作りたいということだったので、暁星学園の敷地を貸すなど協力しました。それで、リセ・フランコ・ジャポネの設立に尽力したということで、大使館が感謝してくれ、「校長を辞めたのなら、フランス政府の招待という形でフランスの大学に籍を置いて研究をしないか」と申し出てくれたんです。

私も校長を首になったら、行く場所もそうないし（笑）、いろいろ考えて、行き先をアルザス地方に決めました。フランスの北東、ライン川をはさんでドイツと国境を接する地方です。長く神聖ローマ帝国の支配下にあり、近代になってからはフランスとドイツが常に係争を繰り返す中で、カトリック勢力が力を持っていました。第二次世界大戦時には、ヒトラー率いるドイツ軍が勝ち進み、フランス語の授業がなくなる日を描いた名作「最後の授業」（作・アルフォンス・ドーデ）の舞台にもなったのです。

そんな歴史に興味を持っていたので、18世紀にゲーテが遊学したというストラスブルグ大学に籍をおくことにしました。ドイツにも行ってみたかったので、半年ほどブザンソン大学にも通いました。フランス語を勉強したり、大学の講義も受けましたけれど、フランスの宗教上の名所・旧跡を回ったり、他のヨーロッパ各国にも出かけて行きました。

何年いてもいいと言われていたんですが、たいした目的もなく長くいてはボケてしまふかなと（笑）。一年半たったところで帰国しました。帰るついでにアメリカやカナダ、チリ、アルゼンチンなどを旅行してきました。

この一年半は、私の人生の中のバカンス期間、充電期間といったものでした。

帰国した1969年（昭和44年）に、暁星学園の理事長に就任。翌年からは暁星学園の幼稚園の園長を兼務、さらに1974年（昭和49年）には再び小学校・中学校・高校の校長に就任しました。

## 帰国子女の受け入れの必要性を痛感

1970年代、高度成長を遂げた日本は、海外からはエコノミックアニマル、日本株式会社などと揶揄され、国内では日本列島改造ブームが起こり、石油ショックに見舞われるなど、経済中心の国になっていました。日本が経済成長するに連れ、商社や銀行などが本格的に海外に進出を開始。家族ぐるみで海外に赴任する日本人も増えていきました。

文部省の統計によると、1966年（昭和41年）には海外で暮らす幼稚園から高校までの子供（海外在留子女）の人数は約4000人でしたが、1976年（昭和51年）には小学校・中学校の義務教育年齢の子供だけで約1万8000人、1986年（昭和61年）には約4万1000人と激増。

当然、帰国子女の人数も増えていきました。1971年（昭和46年）には小学校から高校までの年齢の子供が約15000人でしたが、1976年（昭和51年）には約5000人、1986年（昭和61年）には1万人を超えています。

1960年代や1970年代は、日本人学校が少なかったので現地校に入る子供がほとんどでした。ところ

が、せっかく現地でも英語やフランス語を学んでも、帰国してから語学力を継続できる受け入れ校は皆無に近い状態でした。私立は初めから定員いっぱい取っているので、帰国子女を受け入れる余裕がありません。かといって、公立校に入れると本人が苦しむだけです。赤や黄色のセーターを着ているだけでいじめられたり、英語の発音が英語の教師よりも上手でキザと言われたとか。せっかく欧米で身に付けた英語を日本式の受験英語に変えなければいけないかったり、授業でどんな質問すると生意気だと嫌われることも。日本の社会では、個性があることが良しとされなかったんです。

暁星学園では小学校からフランス語を教えていますし、フランス政府との協力関係もあるから、フランスやベルギー、スイスから帰ってきた子供を以前から広く受け入れていました。ところが、フランス語圏以外の国から帰国した人たちからも、何とか子供を入れてほしいと頼まれることが多くなったんです。

私自身もスイスに留学した経験がありますし、帰国してから日本では欧米式のやり方が通用しないというカルチャーショックを感じましたから、海外で学んできたことを活かせるような受け入れ校があってもいいのではないかと考え始めました。それが、木更津の暁星国際学園の設立へ向けて走り出すきっかけでした。

## 冒険する覚悟

最初は夢みたいな話だと相手にしてもらえませんでした。新しく土地を買収し、校舎を建て、教職員を雇うのですから、何億円もかかる事業になります。当然、理事会で反対の声も上がりました。私が理事長という職

権を乱用しているという非難もありました。

でも、私は失敗したっていいじゃないかと思っただけです。名誉なんてたいした意味もないし、侮辱されてもかまわない。一生懸命やった結果、失敗したのだつたら神様も許してくださいでしょう。神父の身なのだから、財産もないし没収されるものも何もありません。路頭に迷わせる家族もいません。

私が修道院に入ったのは、世俗の生活をしていたらできないことをやるためなのです。暁星学園は裕福な家庭の子供が多く、勉強もそこそこできるし、保護者にもほとんど問題はありません。つまり、教師としての苦労はそれほどないのです。生徒や父兄から尊敬されて、このまま唯々諾々と安穩な生活をしていいのだから、という疑問を以前からもっていました。これで満足しては、修道院の生活を選んだ意味がないのではないだろうか、結婚をして普通の生活を送る人生と何ら変わりがないのではと思っただけです。

修道院で生活する修道士や修道女にも、1年間働いたお金を貯めて、毎年海外旅行に出かける人たちがいます。独身貴族という言葉がありますが、まさにそのとおり。でも、それだったら、修道院に入らないで、普通の社会生活をすればいいのではないのでしょうか。私は常々、修道院は単なる独身クラブではないと言っています。修道生活を選んだのは、普通の人にはできないことをやるためなのです。

もちろん、静かな修道士の一生というものを否定するわけではありません。マリア会は青少年の教育を目的に生まれた修道会ですから、修道院に入ったならば、教師となって子供たちを教え、年を取ってからは修道院で仕事をする。修道院では必要な物は支給されますから、死ぬまで生活できます。規則正しく、時間にしたがって生活していればいいわけです。

しかし、カトリックの宣教師は何百年も前から命がけの冒険をしていました。ヨーロッパから中南米、インド、東南アジアへと海を渡って行ったのです。人食い人種がいる地域にも出かけて行きました。いったん故国

を離れば二度と戻らずに、赴任地で布教活動に一生を捧げていたのです。

暁星学園を創立したマリア会の5人の宣教師たちも冒険者でした。やはり、日本の土となる決意ではるばる海を渡ってきたのです。日本語もよくわからず、日本の生活習慣も知らなかったでしょう。そんな異国にやって来て、小さな部屋を借りて、寺子屋のように子供たちにフランス語を教え始めました。そこからスタートして、暁星学園をつくったのです。

私はせっかく神父の道を選んだのだから、平凡な人生で終わってしまっても構わないと思いました。困難であっても、思い切ったことをして、非凡に生きたいと願ったのです。もちろん、マリア会や暁星学園全体に迷惑をかけることはいけないけれど、失敗したとしても、私一人が不名誉を引き受けて、「ごめんなさい」と謝って山で隠遁生活をすればいい、と腹をくくりました。同時に、信仰があれば必ず山も動くという信念もありました。

木更津の暁星国際学園の設立は、私の生涯にとって一番大きな決断だったと思います。

## 寄附金集めに奔走

海外から帰って来る子供、あるいは親が海外に赴任する子供が入学できる全寮制の学校をつくらうと決意、どこにか理事会で承認を得ることができました。

次にやらなければいけなかったのは資金の工面です。1人100万円の寄附を100人にお願ひすれば1億

集まる。これでやれるのではないか、という簡単な計算をしたんです(笑)。ところが、最終的には10億円ぐらい集めなければいけなくなりました。

まず、募金委員会を作って、暁星学園のOBや父兄の方たちに委員をお願いしました。募金委員長は大蔵省の事務次官だった方が引き受けてくださいました。委員の皆さんには大変な協力いただいたんですが、やはり私自身が頭を下げて「お願いします」と言って回らないと集められるものではありません。学校設立のための寄附金は2年間の免税措置がありますから、とにかく2年間で集めなければいけません。商社やメーカー、銀行と、趣旨に賛同して寄附金を出していただけそうな企業を、足を棒にして回りました。もちろん、玄関払いにされた企業もたくさんあります。どこも100万、500万、1000万というお金を、そう簡単には出してくれません。日本の企業の場合、社会的に意義のある活動に寄附するという習慣が根付いていないので、厳しいものであります。

それでも何とか10億円の寄附金が集まったのですが、その時に思ったのは人の信頼関係がいかに大事かということ。募金委員になってくださった方々も、私が暁星学園で校長をしている時に知り合った方たちです。「校長がやるのなら、助けよう」と言ってくれた人たちなのです。

ある大手工務店の社長をしている人にも、ずいぶん助けていただきましたが、その人との付き合いはひよんなことから始まりました。暁星学園の小学校の工事を発注したのが彼の会社でした。ところが、工事中に暁星学園の隣家にヒビが入ってしまった。それが国家公安委員長を務める大物の家だったので大変。怒って消防署に電話をしたらしく、驚いた消防署員が現場にすっ飛んで来ました。「他の家にヒビが入るような危ない工事をどうしてやるんだ！」と言うわけです。担当の営業課長だった彼は、これは大変なことになったと青くなって私のところに謝りに来ました。私は「たいしたことじゃないよ。私がおわびに行つてあげるから、心配

しなくていいよ」と言ったら、彼は「今まで、こんな施主に会ったことがない」と感激。たまたま、その国家公安委員長の孫が暁星学園の小学校にいて、私が週一回宗教を教えていたんです。それで、その家にうかがって、頭を下げて工事の続行をお願いしました。相手も孫の先生とあって怒れなくなり、「わかった」という返事をもたらして事なきを得ました。

たったそれだけのことですが、私が冒険に挑戦しようとした時に彼が助けてくれたんです。人間と人間の信頼関係というのはスゴク力があるんだなと痛感しました。そういう意味で人脈は大切ですよ。私が本当に困った時に助けてくれる人が何人いるか——私は幅広い分野の人脈に恵まれました。

また、企業ばかりでなく、個人にも寄附をお願いしました。寄附ができる人、寄附をしてもいいと思ってる人を見抜かなければいけません。必要に迫られて、本能的に見抜いていたのかもしれない。例えば、当時、NHKのパリ支局にいた磯村尚徳氏を訪ねて寄附をお願いしたりしました。彼は子供の時に海外で生活して、帰国後学習院に復学しようとしたら、皇族が在籍しているのに日本語がおぼつかない生徒がいるのは迷惑と言われて、暁星学園の小学校に編入。2年間通学していました。そんな小さな縁でも、可能性があれば出かけて行っただけです。

暁星国際学園を設立するのに、寄附金集めが一番しんどい仕事でした。開校してからも財政のことが頭から離れたことはありません。「資金繰りがなければ本当にラクだろうな」と思うことがしばしばありました。しかし、学校経営も事業であるならば、財政面から逃れることはできません。頭を悩ませながら、必死にやっっていくしかないのです。

## 文部省に日参、やっとの思いで補助金を得る

寄附金集めと並行して文部省に日参。補助金を出してもらうように交渉を始めました。

文部省も1965年（昭和40年）に東京学芸大学付属中学校に帰国子女教育学級を設立したり、1967年（昭和42年）より公立・私立の学校の中から帰国子女教育研究協力校を指定していましたが、従来の施策だけでは不十分になりつつあると認識していたようです。

1975年（昭和50年）には文部省と外務省が中心となって、「海外子女教育推進の基本政策に関する研究協議会」を設置。問題の検討に当たった結果、帰国子女を受け入れて、適応教育を行うことを目的とする私立学校の設置に対して、1977年（昭和52年）以降助成措置が取られることになりました。

しかし、補助金をもらうために文部省に何度説明に行っても、なかなか事態は進みません。「こんな資金計画ではできっこない」というのが官僚の言い分です。相当激しくやり合ったこともあり。確かにお願いしに行っているけれど、こちらは乞食じゃない。悪いことをするわけではなく、信念をもって学校をつくらうとしているのだから、何で怒られるんだと思いましたよ。「ダメでもかまわない、補助金は当てにしないで進める！」と思って、「そんなにうるさく言われるなら、もういいです」とタンカを切ったこともあり。絶対にダメならダメと言ってくれば、こちらも対処を考えます。それなのに、いつまでもグチグチと文句をつけてばかりいるから、悔し紛れに言っていました。本当は辛抱強く待たなければいけないでしょうけど（笑）。相手は「何だ、こいつは」と思ったでしょう。

そんなこともありましたが、2年間近く文部省に通って、最終的には4億8000万円の補助金をもらえることになりました。寄附金が10億円、借り入れが10億円、総計30億円で、どうやら資金の目途はつききました。

## 木更津の山を切り拓いての学校づくり

資金の手当に用途がつくと、今度は場所探しです。関東一円、埼玉、千葉、静岡まで見に行きましたが、土地代が高いところは買えません。そして、寮やグラウンドも造るので、ある程度の広さが必要で、そんな条件でいろいろ探していたら、千葉県の木更津市に新日鉄が持っている土地が候補に上がってきました。

木更津市は東京湾に面し、戦後、君津市とまたがる湾岸の埋め立て地に新日鉄などが進出。工場を操業していました。そして、新日鉄は房総半島一帯のあちこちの土地を買収していました。多角化経営で牧畜をやったり、不動産をやったり、国際都市を作る計画だったらしい。私たちが目を付けたのは、新日鉄が持っていた土地の中の、3万坪ほどの山でした。

当時は未開で、木更津のチベットと言われていた土地でした。キツネやタヌキが出て、農道ぐらいいしかありません。でも、私は全寮制にするつもりでした。月1回ぐらいいしか生徒は家に帰らないから、不便でもいいじゃないかと考えたんです。

新日鉄に坪1万3000円とふっかけられました。学校をつくるのだからと、坪1万1000円に値切りました。それで3億3000万円。ところが、山ですから造成しなければいけません。新日鉄は商売上手で、坪2000円安くする代わりに造成をやるせると条件をつけてきました(笑)。仕方ないんで発注したんですが、道路を作り、上下水道を通してと造成したら、結局10億円かかってしまいました。

ともかくにも、校舎や寮などの建物も完成。1979年(昭和54年)に念願の暁星国際学園高校の設立にこぎつけることができました。帰国子女の受け入れを目的とする私立高校としては、国際基督教大学高等学校に続く2番目の開校です。関西では同志社国際高等学校が3番目の高校として開校しました。1981年(昭

和56年)に中学校を設立、1994年には小学校と中学・高校の女子部をつくりました。

当初は木更津の山奥に学校をつくるなんて気遣い沙汰だと、ずいぶん非難されたものです。まず、木更津駅からの交通機関がまったくない。通学なら無理な立地条件です。でも、全寮制だから家に帰るのは1カ月に1回ぐらいいでしょう。それなら、親が送ってくると思いましたが、そして、募集は関東だけでなく全国にしました。

開校して18年たった今、暁星国際学園の隣に「かずさアカデミアパーク」という研究都市が誕生。公的な試験研究機関や製薬会社やコンピューターメーカー、合成ゴムメーカーなど科学技術系の企業の研究所が集まっています。千葉県が建設したセンタービルにはホテルオークラが入るなど、都市として必要な機能が揃い始めました。おかげで学校の前から木更津駅まで舗装された道路がつながっているし、ずいぶん便利になりました。さらに、1997年には東京湾の海上で川崎と木更津を結ぶ15kmの東京湾横断道路も完成します。東関東自動車道の広域幹線道路の整備も進んでおり、飛躍的に交通が便利な場所になるでしょう。

土地が安く、まとまった広さがあるということを決めたのですが、今では「先見の明がある」などと見当違いの賛辞をいただいています(笑)。

## 全寮制で子供たちを預かって

帰国子女の受け入れもそうですが、両親だけが海外に赴任して子供を日本に残していく残留子女も入学することを想定して、全寮制にしました。全寮制の場合、1日24時間を学校か寮で過ごすわけですから、教師は生

徒に細やかな心遣いをしなければいけません。

今、問題になっているイジメもなくはありません。生徒にとつてみれば、それぞれの家庭で可愛がられてきたのに、集団生活をしなければいけないのですから、いろいろな悩みがあつて当然です。また、前にも述べましたが、家庭崩壊の時代ですから、両親が別居していたり、うまくいっていない場合、子供の心は傷付いています。そんな時に、誰に苦しみを訴えたらいいのか。生徒は生徒なりにプライドがありますから、自分から進んで言いたくないことです。でも、1人では気持ち処理しきれない。そういう時にこそ、カウンセリングが必要になってきます。悩みを話せる教師が学校にいるかどうかが重要です。

そして、教師は打ち明けられた秘密を絶対に守ること。他の教師に話してしまえば、生徒は裏切られたと思うでしょう。カトリックの場合、教会に行つて懺悔をします。神父は懺悔で聞いたことは一切しゃべりません。例えば、男女の問題にしても、過ちを犯したと聞いても、親にも他の誰にも絶対言いません。しゃべつてしまつては、神父の守秘義務を果たさなかつたことになりすから。そして、自分の過ちや悩みを打ち明ける機会があり、その秘密が絶対に守られるというシステムによつて、信者の心は救われているわけです。カトリックにおける神父の役割を、学校では教師が果たしていかなければいけないと思えます。

## ベトナム難民や海外からの留学生を受け入れて

暁星国際学園では、日本人の帰国子女や残留子女のほかに海外からの留学生も受け入れています。現在、ベトナム難民や中国、台湾などアジアから10人の留学生が在籍しています。ベトナム難民はもちろん、中国や台湾の留学生は授業費免除です。彼らはお金がないですからね。戦前の日本が行つたことを考えれば、少しは彼らの役に立ちたいし、これからはアジアの人たちと文化交流をして、共存共栄していかなければいけない時代でしょう。日本で勉強をして、日本の大学に入つて、日本にも良い人がいる、と感じてもらふことも大切です。

アジアの留学生に限らず世界各国の留学生がいるというのが、私の理想です。各国から集まってきた学生たちが、一つの大家族となつて学び、そういう精神を身につけて故国に戻つてくれれば、我々の建学の精神が全世界で生きてくるじゃないですか。それが、我々の生きがいであり使命だと思つたのです。

ベトナム難民に関しては、カトリック教会から依頼があり、犬飼道子さんが1986年に設立した犬飼基金の第1号の学生を引き受けたのが始まりです。犬飼基金というのは、いつの日か日本と東南アジアとの架け橋になる人材や戦火のただ中にあるユーゴ・旧ユーゴの青少年の養成を目的とするもの。ところが、難民を引き受けてくれる日本の学校がなくて困つていたらいいんです。私のところは全寮制ですから、住む場所も心配しないでもいいでしょう。ベトナム難民の人たちがこれだけ来日しているのですから、1学年1人ぐらいは引き受けていいんじゃないでしょうか。それくらい救うのは日本の義務だと思つし、喜んで行つべきでしょう。

犬飼基金第1号の学生はゴン君といつて、1人でポートピアプルとして日本に来ていたのですが、母親や兄弟はベトナムに残つていますから、彼の父親がポートピアプルとして日本に来ていたのですが、母親や兄弟はベトナムに残つていますから、

父親本人の生活と故国の家族への仕送りだけで、彼の学費まで出せないんです。それで、こちらで免除できるものは免除して、中学1年から教育しましょうということになりました。

小学校5年生で命がけて国を出てきたのですから、授業を受ける態度も真剣です。こういう生徒が自分たちの学校にいるということは、他の生徒への教育にもなると思います。難民の学生に対して親切にして友情を育んだり、自分の境遇に感謝する気持ちを持つでしょう。

そして、本当の幸せとは何かを考えるきっかけにもなります。美味しいものをいただく喜び、良いものを身に着ける喜びも、人間に許された喜びです。しかし、人間というのは本来もつと精神的な喜びを求め存在なのです。現在の日本は物質的には満たされていますが、幸福だと思っている人は少ないのではないのでしょうか。東南アジアやアフリカ、南米などでは貧しい生活を送る人たちが大勢いますが、私たちよりも幸福かもしれません。

生徒たちに物質的な楽しみではなく、人を助けてあげた時や善をなした時の喜び、苦しんでいる人の相談にのったり、病気の人を見舞ってあげた時の喜びが、いかに大事なことを教えていきたいのです。苦しんでいる同級生や悩んでいる同級生、寂しそうにしている同級生を見て、友達になろうと思ったり、何か助けることがないかと考える生徒になってほしいと思っています。

ですから、ベトナム難民もかわいそうだから引き受けたのではなく、キリスト教の愛の律法を実践すべきカトリックのミッションスクールの使命と考えたのです。

## 国際化の第一歩は語学を学ぶこと

国際教育をしたいと願って、暁星国際学園という名前をつけました。国際教育が、即、語学教育だとは思いませんが、やはりコミュニケーションの手段ですから、外国語を話せなければ先には進めません。日本の語学教育の欠陥は、よく言われることですが、話せないということ。受験英語と日常英語は違うのです。

語学は小さいうちから毎日やらなければ、なかなか身に付きません。暁星学園の小学校でもフランス語を週2時間教えていましたが、毎日やらなければ効果が上がりません。ですから、暁星国際学園に小学校をつくって毎日語学を教えるのが念願でした。今、小学校1年生の時間割は、1時間目にフランス語、2時間目に英語、3時間目が国語と午前中は語学です。フランス語はベルギー人、英語はカナダ人とネイティブスピーカーの先生が授業を行っています。

最初はやはり反対がありました。小学生に毎日英語とフランス語を教えてどうするんだと。でも、私はこれだけは譲れないと主張しました。語学を毎日勉強して、外国人の先生とコンタクトをして、というのが国際小学校のあるべき環境なのですから。

この試みは成功したと思っています。1週間に1度、私が校長として朝礼に行くと、子供たちが「ボン・ジュール」って挨拶するんです。私が「コマンタレブー」（いかがですか）と聞くと、それぞれ答えます。英語でも「ホワットユアネーム」「マイネームイズ○○」と言えるんです。

なぜ小さい頃から語学をやれば良いかと言うと、吸収力があるという利点もそうですが、外国人に対して苦手意識を持たないうちに話せるようになることがポイントだと思います。私も26歳で初めて外国に行ったのですが、やっぱり緊張しちゃうんです。授業で発言する時も、発音は大丈夫だろうかとおどおどしてしまうんで



すね。ですから、中学生ぐらいになつてしまうと、外国人に対してシャイになつて話しかけません。小学1年生は外国人に対して苦手意識なんて持っていませんから、平気で話しかけられるのです。小さい時から自然に外国人と接していれば、苦手意識を持たないで済むのではないのでしょうか。

これからの日本人は、世界中で仕事をやる時代です。南米に出張して帰国したら今度は香港へ、という具合に地球が狭くなっています。黄色人種、白色人種、黒色人種——どんな人とも付き合っていかなければいけません。ですから、世界の誰とでも自然に話ができるような人材を育てていかなければいけないと思つています。通訳を通して話せば倍の時間がかかるけれど、フエイストウフエイスで話せば時間も短くて済み、ダイレクトに相手の表情も読みとれます。21世紀に生きる子供たちには、そういうことができるような教育をすべきなのではないでしょうか。

## 真の国際人とは

コミュニケーションの手段として語学は必要ですが、国際人に育てるには日本人としての教育が不可欠であることは言うまでもありません。日本人としてのアイデンティティー——日本語ができることはもちろん、日本の文化、歴史、伝統について勉強することも大事なことです。

私もフランス大使館に招待された時など、必ず日本の文化について聞かれます。茶道や華道、歌舞伎、漆器や陶器のことなど日本人としての教養が必要だと実感します。私は歌舞伎について全然知りませんでした。暁

星学園の卒業生に歌舞伎役者もいますが、時代劇のようなことをやっているのだろう、くだらぬとか言っていました(笑)。ところが、フランス大使に質問されてよくわからなかつたので、これはいかんと慌てて見に行つたこともあります(笑)。

そして、同時に世界の歴史や文化も学ばなければいけません。サミットで先進各国の首脳が集まるのですが、そこで日本の首脳はなかなか話に入っていけないと言うでしょう。語学の問題もあるけれど、パレスチナ問題1つ取つても、その背景にはアラブとイスラエルの2000年にわたる歴史があります。だけど、日本人は詳しいことを知らないでしょう。なぜ、こんなに戦争を繰り返さなければいけないのか、宗教的な背景などがわかっていません。あるいはカントやヘーゲルの話が出たり、ギリシャ神話の話が出て、ついていけないらしい(笑)。それで、小さくなつてしまつたらか。

ですから、私は語学はもちろん日本の歴史や文化、世界の歴史や文化などの教養を含めて、国際教育だと言つています。

そして、もう一つ大事なことは心です。人を受け入れる広い心、差別しないまっすぐな心。そういう心を持つた、人間としての存在を感じさせる人物が国際人になれるのではないのでしょうか。日本の首脳では大平正芳首相が、外国の首脳から「国際人」だという評価を受けたとか。心にゆとりがあつて、人を受け入れる寛大さがあると言われたそうです。

いくら偏差値が高くて、真の国際人にはなれません。教養と知性があり、ゆとりのある心を持つて、外国人を魅了できる人にならなければ真のコミュニケーションもできないし、人間的な付き合いもできないのです。



1979年4月1日 暁星国際高校落成式での大司教の祝別



天使の歌声を聴かせる暁星小学校の聖歌隊



式参列の暁星学園関係者



第1回暁星国際高校入寮式



落成式当日聖歌隊と



開校式当日



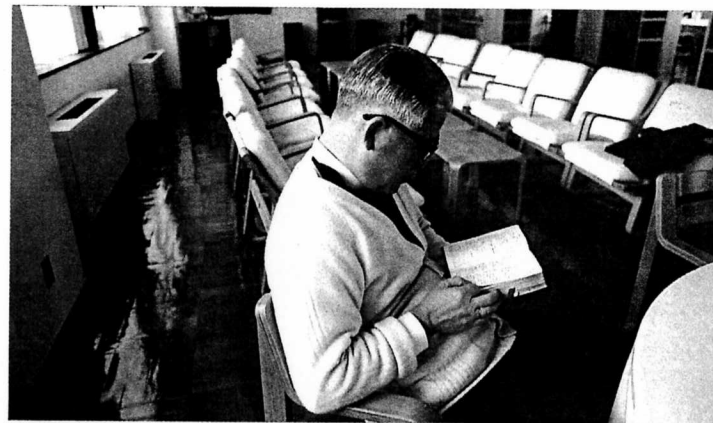
落成式を終えて関係者と



高校生の修学旅行先の中国で



小学校のクラスにて



聖務日禱(神父の日課の祈り)中



暁星国際学園中・高男子部 体育祭



管理棟パントリーにて



「励ます会」での来賓挨拶



有志が催した還暦を祝う会



1985年2月13日開催  
「田川茂先生を励ます会」にて  
(参加者数2413人)